

東京 IPO 特別コラム

2019年1月4日 Vol.137

波乱の幕開けとなった2019年株式相場

昨年末に見られた株式相場の急落が大発会の本日も見られ波乱の幕開けとなった2019年。米中貿易戦争に起因した企業業績への影響が懸念されている中、中国での売上減が見られたアップルの四半期業績に表面化。アップルの株価急落がNYダウの660ドルもの大幅な下落につながり日本株にも影響をもたらした。同時に見られた為替相場の円高も株式相場の下落につながった。ある程度は予想されていたこととは言え、年初の波乱相場は今年の先行きにも厳しさを感じさせる。

昨年年初は先高感がある中でのスタートが見られたものの年末にかけて失速。今年はその逆で先行き不透明感のあるスタートとなった訳だが、大発会の相場が安いからと言っても今年1年を通じて株式相場が下落する訳ではないだろう。波乱の中から見出せる光明もある筈。客観的に見れば今年の世界の株価は確かに波乱の多い年になるだろうが、米中貿易戦争下での両国の今後の通商交渉の行方にも左右される展開が想定される。減税効果による米国の景気の良さが米国の株高をリードしてきたが相次ぐ利上げが景気の足を引っ張る懸念も台頭していることもここに来ての株価下落につながっている。大幅な財政難に苦しむ米国を復活させるべくトランプ大統領が自国優先主義の下で打ち出した対中貿易での関税引き上げによる増収増税によって米国にとっては財政問題の改善が期待されるとの考え方もポジティブに捉えることができる。

日本株は海外株安や為替相場に連動し、想定以上に弱い展開が見られるが、個別に見るとPER、PBR、配当利回りなどの指標で売られ過ぎている銘柄も多い。また、景気の波にさほど左右されずに業績の成長トレンドを描ける銘柄も見出せる。少子高齢化が人手不足をもたらす中、企業業績にもマイナスの影響を及ぼす中で、AIやIoT、RPAといった技術革新が進展。日本企業の活躍の場は広がりを見せている。直近の原油価格の値下がりもガソリン価格の下落につながることで企業によってはコスト面でプラスに働き、今下期の業績に反映されると期待される。

昨年のIPO90銘柄の株価は上場後の高値形成後に大きく低迷するパターンを描く銘柄が圧倒的で、その多くは公開価格を下回っている。短期投資家を主体にした株式市場に中長期の優良な資金が入ってくるのか見守るとともにIPO後の企業のIRへの注力、認知度向上への努力に期待したい。株式市場では既にPERが5倍を割れ、PBRも0.4倍を下回り始めた銘柄が見られる。IPOしたばかりの銘柄の中にもそうした低評価に甘んじ始めた銘柄も見出せる。昨年末の需給悪の時期を抜けた今、多少でも前向きに投資家が企業を評価し始める時期がやってくることを期待するとともに、波乱のスタートとなった元気のない株式相場が今年の干支と同様に猪突猛進で蘇ることを皆さんとともに祈願したい。なお、年頭のコラム執筆にあたり、旧年中のご愛読に感謝申し上げますとともに、2019年も引き続きのご愛読をお願いしたい。

(東京IPOコラムニスト 松尾範久)